

---

# 竜の盟約

里桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜の盟約

### 【Nコード】

N5422Y

### 【作者名】

里桜

### 【あらすじ】

三度目の人生は、孤独とともに幕を開けた。二度目の人生で出会った、永遠の時を生きる魔道士イムルドと、再び会うことだけを支えに、私は今を必死で生きている。 (天魔の刻印の続編になります。ただ、前作とは、雰囲気さがらりと変えて書いてみようと思っっています。コメディ路線からシリアス路線に変更の予定です)

## 前作「天魔の刻印」の登場人物と設定

登場人物（竜の盟約で、名前が出てきた人は、随時加えていこうと思っっています）

ヒト 主人公。もとは日本人。四十歳で死亡。白大陸に生まれ変わる。背中に「刻印」を持っていたため、二回目の人生では、色々と大変な目にあっていた。

イムルード 永遠の時を生きる魔道士。常識が欠落している部分が多い。白髪、赤目。いわゆるアルビノの容姿。かなりの美形。人界において「白き賢者」と呼ばれていた。

セト 獣人と人間の間の子。ヒトとイムルードと一緒に暮らしていた。

ナン 魔族。本質は銀色の狼。イムルードの友人。

## 設定

ウトナ語 古代語。魔族が使っている言葉。

トルバディア 白大陸の大国。ウトナ語で、千年王国の意。

### 三度目の人生の幕開け（前書き）

あらずじにも書きましたが、「天魔の刻印」の続編になります。はじめましての方には、あんな長い話を読まなくても済むように、少し説明を加えさせていただきました。

ただ、どこまで説明したものが、頭を捻っています。これから読んでくださる方がいるとしたら、あまりネタバレなことを書きすぎてもいけないので…。

一応、「竜の盟約」単体で楽しんでいただけるように、書くことと書いていますが、手探り中です。

ご無沙汰しておりましたの方々には、「シリアス」「切ない」を目標にしたいと思っています。（できるのか？と、今も自問自答中ですが…）

前作で、課題の残った「恋愛」についても、もうちょっとついで頑張ってみようかと思っています。

ムーンにのせた話が、気になるという方が多かったので、急ぎよ思いついて書きはじめました。まだ見切り発車的な部分が多いのですが、ゆっくりとやっていきたいと思えます。

そして…。

イムルードが出てくるまで、ずいぶんとかかりそうです。（まだ書いている途中なので、いつになるのか、はっきりとわかりませんが先に謝っておきます。ごめんなさい。

## 三度目の人生の幕開け

私は、逆さ吊りにされた状態で、内側から逆流してくる水を吐き出していた。

ぼんやりと、かすんでいた意識が、しだいにはっきりとしてゆく。

パァン！

肌を、手のひらで叩く音を耳で拾ったのと同時に、私はお尻に鋭い痛みを感じた。

私は、何度も、何度も尻を叩かれる。

薄暗せいか、周りがよく見えないが、視界の先にぼんやりと見えるのは、太い腕、太い首、逞しい肩、厚い胸。どこをとっても厳つい輪郭だった。

そいつが、私の両足を鷲掴んで、逆さに吊るしたあげく、何度もお尻を叩いていることが理解できた。

私は、瞬時にして頭に血がのぼる。

痛いわね！ 何すんのよ！？

思わず、怒りをあらわにして叫んだのだが、口から漏れたのは「フギヤア」という赤ん坊の鳴き声だった。

あれ？

何だかデジャヴ？

これは、もしかして、もしかしなくても…。

「息を吹き返したか」

尻を叩く手を止め、少々しゃがれた男の声が、暗闇に響く。

男の背後には、炎の影が揺れていた。

「生き残ったことが、果たして幸せであるのだろうか」

男の声に、幾ばくかの皮肉さが宿る。

「国が滅んだ日に、家族までもを失って、この世に生をうけるとは、

数奇な運命を背負わされたとみえる」

私の足を掴んでいる男が使っている言葉は、私の二回目の人生において、トルバディアという大国で使われていた言葉と、ほぼ同じだった。言い回しが、少し違っているが、内容を理解する分には問題がない。

言葉が通じることは、まことに喜ばしいことなのだけれども、なんだか、話の内容がえらく物騒な気がする。

国が亡ぶ？

家族を失う？

今、そうおっしゃいましたよね。

不意に、勢いよく扉が開く音がした。

「ウアルス將軍、こんなところにおられましたか。火の手が回ってきております。お早く」

將軍？

つまり、私の足を掴んでいるこの男は、どこかの国の將軍様というわけか。

そして、火の手というからには、男の背後にゆらゆらと揺れている炎の影は、火事ということになるのだろう。

將軍と呼ばれたその男は、拾い上げた布で、私を乱雑にくるむと、抱え込んだ。

「その赤子、まさか連れてゆかれるおつもりですか？」

部下と思しき男の声が、行為を諫めるように問う。

「敗軍の將に、命を委ねることが、この子の為とも思えぬが、これも天が授けし縁。せつかくこの世に舞い戻った命、このまま焼かれて、散らすのも忍びない」

「かような場で、情けなどかけられますな。我等には、タイミールの再興という使命がございます。そのような足手まとい、今、背負うわけにはまいりませ」

不自然に言葉を切り、部下と思われる男が、息をつめたのを感じた。

恐らく、ウアルスが睨んだのであろうことが察せられる。周囲の空気も、威圧感を孕んでいた。

「赤子一人救えずして、国を興すことなどできようものか」  
ウアルスは、低くそう言っつて、私を腹部に紐で括りつけはじめ。括り終えると、私の背中にそつと手を添えた。

「この先の命、保証してやることもできぬが、ともに参ろう」  
あるいは、憐れみや、悲壮感も混じっていたのかもしれない。だが、妙に安心できる、優しい声音だった。

数枚の扉をくぐつて、外に出るなり、鬨の聲が耳に飛び込む。  
雨音も聞こえていた。

泥を踏み分けて走る、たくさんの足音が聞こえる。

刃物同士がぶつかり合う音。人間同士が揉みあう音。断末魔の叫び声。馬の足音。絶命の嘶き。

時折、耳慣れない生物の咆哮が、耳をつんざいた。

ザアザアと、雨が大地を叩く音に紛れ、耳を覆いたくなるような惨状が、まざまざと伝わってくる。

ウアルスは、時折剣を振るつては、敵を屠っていた。

頭上からは、ウアルスの荒い息づかいが聞こえてくる。

激しく揺らされ、恐ろしい物音ばかりが聞こえてくるが、ウアルスの鼓動に耳を傾けていれば、それほど怖くもなかった。

私は、じつと縮こまる。

ふと、先ほど耳にした言葉を、想い起していた。

家族を失って、この世に生をうける。

このウアルスという男は、確かにそう言っていた。つまり、今生の私には、すでに家族がないということか。

「家族」という言葉に、酷く胸が痛んだ。

最初の人生で、私は、夫を早くに亡くしていた。

娘と息子を一人ずつもうけ、女手一つながらも、なんとか無事育

て上げることができた。

幸いにも、娘の結婚を見届けることができ、孫という存在を得る喜びにまで恵まれたが、私は四十歳にして、彼らを残してこの世を去った。

二度目の人生では、予言のせいで、生まれてすぐに殺されかけた。だが、母親に庇われてなんとか生き延びることができた。

血は繋がらないながらも、温かい家族にも恵まれて、孤独や寂しさを感じることもなかった。後に、実の父親とも再会し、温かい関係を築くことができた。

だが、三度目の、この人生。私には、もはや血の繋がった家族はいないようだ。

それだけではない。同時に、二度目の人生で手に入れたはずの、温かい家族や、仲間たちすらも、私は失ってしまったのだ。

その事実には、途方もない寂しさを感じていた。

こうして生まれ変わったというのだから、私の二度目の人生も、すでに終わりを迎えたということになる。死に際の記憶はないが、ずいぶんあっけない終わり方だったと思う。

たぶん私は、病気で死んだのだ。

幸い、父親よりも先に死ぬような、親不孝はしなくても済んだが、セトとイムールドには辛い思いをさせた。

私は、彼らにお別れを言うことすら、できなかったのだ。

病氣なんて、早く治して、元気になるつもりだったというのに、あっさりと負けてしまったとは、我ながら情けない。

こうして生まれ変わっているからには、元気になるという、みんなとの約束を、私は、とうとう果たすことができなかったということだ。

きつと、みんな怒っただろうな。

そして、悲しんだはずだ。

それを思うと、ただやりきれなかった。

人の死を見送ることは辛い。

別れが、人生で必ず訪れる、避けようのない定めとわかってはいても、いつでも途方もない悲しみに襲われる。

私は、自分の方が先に死んでしまった。見送る辛さを経験することはなかったが、それでも、見送らずして、急に突き付けられる別れも辛いものだ。

会いたくても、会えない。その事実だけが、重くのしかかる。

私は、いつも唐突に、そして一方的に、与えられるばかりのこの運命に、怒りすら覚えていた。

死んで生まれ変わるなら、何故、この記憶も消し去ってはくれないのだろう。

いや、皆と分かち合った幸せな記憶を疎ましく思っているわけではないのだ。

ただ、幸せな記憶であればあるほど、手放してしまった幸せが辛い。

何も知らずにやり直せたならば、どんなに良かったことだろう。こんな、行き場のない怒りと悲しみを、抱かずに済んだものを……。皆の顔が、脳裏に思い浮かぶ。胸の奥が、酷く痛んだ。絶望が鎌首をもたげはじめ。

先ほどの会話の中に、「タイムール」という言葉が聞こえた。しかもウアルスは「国を興す」と言っていた。つまりタイムールは、国名であるのだ。

しかし、私はその名前に全く覚えがない。二回目の人生で住んでいた、白大陸ワラルラートにはなかった国名なのだ。

その事実には、うすら寒いものを覚えていた。

もしここが、私の知る世界でなかったとしたら、私は、いったい何を頼りに生きていたらよいのだろう。

仮に時代が違っていても、もしここが、クル・エ・カルナの白大陸であるのなら、私はイムルードに会えるかもしれない。それだけではない、寿命の長い種族である、ナンたちにも、会えるかもしれないのだ。

だが、もし違っていたとしたら、私は、今後、何を頼りに生きてらよいのだろう。

体の奥底が、ヒヤリと冷たくなるのを感じた。

私は、すぐさま暗い考えを、脳裏から追いやる。

ただ、怖かった。

事実を知ってしまうことに、少し臆病になっていた。

僅かに希望を抱くのは、言葉がトルバディア語であるという事実。多少の違いはあるものの、ウルスが使っているのは、まさしくトルバディア語なのである。それはつまり、ここがトルバディアに所縁があるということになるのではないだろうか。

私は、その僅かばかりの希望に、縋らずにおれなかった。

全てを失くしてしまったと思うのは、あまりにも辛すぎる。

縋るものがなければ、これから歩むべき人生の長さに、早くも絶望してしまいそうだったのだ。

私は、ギョツと目を閉じる。

今はもう、何も考えたくはなかった。

耳に飛び込んでくる、力強い鼓動に耳を傾ける。

体が酷く疲れていた。純粋な眠りを欲しているのがわかる。私は、その欲求に逆らうことなく、束の間の安穩に身を投じたのだった。

# 1 チビ

私が、三度目に手にした人生は、幸いにも二度目の人生と同じ世界であった。

創世神話に語られる、始まりの神の名を冠する世界　　クル・エ・カルナ。

クル・エ・カルナには、五つの大陸が存在している。それぞれの名を、アルラート青大陸、セルラート銀大陸、ソルラート金大陸、グルラート黒大陸、ウアルラート白大陸と呼んだ。

私は三度目の人生で、青大陸に生をうけていた。

前回の人生から、どれだけ時間が過ぎ去っているのか、見当もつかない。

ここ青大陸は、白大陸から遠く離れており、白大陸の情勢を知る機会には、いまだ恵まれていないのだ。

空を見上げれば、美しく高い青空に、薄く刷いだような秋の雲が見える。

だが、地上に目を移せば、悲惨な現実を、目の当たりにすることになるのだった。

私が住んでいるのは、青大陸の南部に位置するクインシエラ王国の、首都スルフエだ。

そのスルフエの、暗部とも呼ばれるルソン地区　　いわゆる貧民街に、私は住んでいた。

周囲は、みすばらしい土壁が、ひしめくように覆いつくしている。くねくねと曲がりくねった狭く不潔な路地裏が続き、路地の片隅には、無気力に蹲る人の姿が見えた。

人々を覆うのは、紛れもない倦怠感だ。

一度までおちてしまえば、どんなにもがいたところで、簡単には抜け出すことができない最底辺。

ここでは、逃れようのない、辛い現実ばかりがつきつけられる。

「おい、チビ、勝手にうろつくなよ。師せんせいが心配するだろ」

少年独特の高い声に咎められ、私は後ろを振り返った。私の背後には、痩せ細った、目つきの悪い少年ラルフの姿があった。

ラルフの年齢は、およそ十二歳らしい。何故「およそ」という言葉がつくのかというところ、ラルフは捨て子であるため、はっきりとした誕生日がわからないのだ。

ラルフは、慢性的に栄養が足りないせいで、せいぜい十歳ぐらいにしかみえない。

かく言う私も、二歳半になるのだが、発育不良な状態だ。

ラルフは、塀の上に座り込んでいた、私の脇の下に手を差し込み、ひよいと降ろす。

「チビ、お前は本当に猿みたいなやつだな。どうやって、こんなところ登ったんだよ」

「どうやって？」

「そんなの自力で登ったに決まってるじゃない。」

「今の私は、物凄く身軽にできているのだ。」

助走つけて飛べば、塀くらい簡単に登れんだからね。なめんなよ。

私は、心の中でだけそう言いながら、無言でラルフを見る。

ひとつ前の人生で、私は、魔法が使えた。今は、全く使えないが、その代わりとでも言うべきか、今生の体は、たいそう身軽にできていた。

ちなみに「チビ」というのは、ここでの私の名前だ。もっとも、師だけは「可愛い子」と呼んでくれるが。

実のところ、今の私には、名前がない。

青大陸では、親か、それに準じる保護者が、名前を授けるものと決まっている。ラルフの場合捨て子であったので、師が名づけたらしいが、私の場合、少々特殊な事例であるため、今のところ、保留になっているのだ。

もう少し待っても、名前が貰えなかったら、自分の本来の名前を名乗ろうかと思っている。

しかし、今は、何も知らない子供のふりをしているので、そういう自己主張はしないことにしていた。

今の私は、少しだけ周りと距離を置いているのだ。

また、いずれ失ってしまうかもしれない関係を、濃密に築くことに、私は臆病になっていた。

「まったく、手間をかけさせんなよ」

ラルフが、グシャグシャと私の頭を撫でまわす。ひとしきり撫でまわすと、右手をさしだしてきた。

私は、そのラルフの手に、自分の手を絡める。痩せて骨ばっているが、温かい手だ。

ギュツと握られ、いくぞとばかりに手を引かれる。

私は、ラルフを見上げた。たとえ家族がいなくとも、私には、こうやって迎えに来てくれる存在がいる。

その事実にあ堵しながら、私は、ラルフの半歩後を歩いていた。

「可愛い子、いったい何処に行っていたの？ 少し目を離すと、すぐどこかに行ってしまうのだから……。心配したのよ？」

師が、私を抱き上げて、覗き込む。

師の名は、リライという。年齢は三十代中ごろの女性で、本来は、アシル正教会の修道者だ。

しかし、今はルツツ孤児院の責任者をしている。

ルツツ孤児院には、私とラルフを含め、現在五名の子供が身を寄せていた。貧民街にある孤児院なのだ。経営状態は、いわずもがなの火の車だ。

師は、寄付を集めるために、毎日東奔西走しているが、結果はあまりかんばしくないようだ。

最近、師が大切にしている本までもを質に出して、お金を得ている。師は、巧みに隠しているつもりのようなのだが、子供たちは騙せても、私の目は騙せない。

そこまでして、私たちを守ろうとしてくれるこの女性に、私は、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

早く大人になりたい。師が苦勞をしなくても、たくさんの子供たちを育てられるように手伝ってあげたい。

今の私の願いは、早く大人になることだった。

同じ思いを抱いているであろう子供が、ここにはもう一名いる。ラルフである。

ラルフは、ルッツ孤児院で二番目に年長だ。

一番上は、ルネという十四歳の女の子で、彼女は今、花売りの仕事をしていた。ちなみに、三番目は六歳のルドル、四番目は五歳のラキ、この二人は、やんちゃ盛りの男の子だ。そして最後が私である。

ルネが働き出してからというもの、ラルフは焦燥感に駆られているようだ。傍から見ても、その思いは、手に取るようにわかった。

そしてその思いが、少々危険な方向に向かいはじめていることを、私は懸念している。

どうやらラルフは、こども童師じいになろうとしているようだ。

## 2 竜師

竜師りゅうじというのは、簡単に説明すれば、竜に携わる仕事をしている者たちの総称である。

ここ青大陸には「竜」と呼ばれる生き物が、確かに存在するのだ。

竜は、本来、銀大陸セルラートおよび、銀大陸周辺の、銀海セルシーラに生息している。「竜」と呼ばれてはいるが、私から見れば、恐竜にそっくりな生き物だ。巨大な爬虫類と分類した方が、しっくりとくる容貌をしている。

竜は、大まかに分けて、四種に分類される。

二足歩行の火竜族かりゅうぞく、空を飛ぶ翼を持つ風竜族ふうりゅうぞく、銀海に生息する水竜族すいりゅうぞく、四足歩行で、巨大な体を持つ土竜族どりゅうぞく。

この四種において、身体的特徴によって、更に細分化されるのだが、今はそこまで細かく説明する必要はないので、省かせてもらおう。

この四種族の戴く名は、それぞれの竜が、体の内側に宿している、竜石りゅうせいしの属性をもあらわしていた。

竜石りゅうせいしというのは、竜が体内に持っている、魔力を秘めた石の総称である。

火竜族の持つ火石かせきには火の魔力が、風竜族の持つ風石ふうせきには風の魔力が、水竜族の水石すいせきには水の魔力が、土竜族の土石どせきには土の魔力が、それぞれ宿っている。

魔法の存在するクル・エ・カルナに在りながら、何故か、ここ青大陸の人間は、魔力がない。それゆえ、魔法を使うにはこれらの石が必要だった。

竜石は、竜が一匹につき一つ、必ず持っているものなのだが、この石一つが、実は、びっくりするくらいの高値で取引されている。

いや、石に限ったことではない。生きた竜も、竜から採れる武器や防具の材も、竜に関わるものすべてが、その希少性ゆえに、それこそ人生が変わるくらいの高値で取引されていた。

これら竜にかかわる仕事を生業とするものを、総じて竜師と呼んだ。

竜師には、本来三種あるが、一般的に竜師というと、かくりゅうし獲竜師とりよ獵竜師のことを指した。

獲竜師とは、小型の竜を生け捕りにする仕事を負う竜師のことである。

獵竜師というのは、大型の竜を狩り、竜石や、武器、防具の材を集める仕事を負う竜師のことである。

これら二つに、もう一つ、ちゅうりゅうし調竜師という竜を調教する仕事を負う者を加えて、その三つの総称を、竜師と呼ぶ。

なぜ、前者二つと、後者一つを分けるのかというと、仕事をする場所が違っているからだ。

調竜師は、生け捕られた竜を飼い慣らし、人間が扱えるように調教するのが仕事であるが、これは、獲竜師や獵竜師の現役を退いた者が、青大陸において就いているのが現状だ。

対して、獵竜師、獲竜師は、銀海を渡り、銀大陸において仕事に就く。

この差は、天と地ほどあるのだ。

竜の生息する広大な地　　銀大陸。

ここは本来、人間が、足を踏み入れてはならない、竜が支配する場所なのだ。

竜は、銀海を越え、青大陸側に渡ると、狂暴性がわずかに落ち着く。

だからこそ、青大陸では、調教し、飼いならして、じゅうじ飼竜とすることができのだが、銀海、銀大陸においては、その獰猛さが、極限

まで解放されている。

まるで、何かを必死で守るかのように、捨て身で人間を排除しようとするのだ。

ゆえに、銀海を渡ることからして、困難を極めた。

青大陸から銀大陸に渡る船が出ているのは、ウィルガーニヤ国のアフリート港、キエネ国のルアダム港、ウオーリス国のラテルネ港、クインシエラ国のウエトフ港の、計四港のみである。

青大陸には、十九の国が存在している。港町も、数多くあるが、銀大陸への渡船業を興しているのは、この四つの町のみしかない。

しかも、この四港の渡船事業は、何れも、国を挙げての国家事業であった。

銀海を渡るといふことは、それだけの危険が伴うということなのだ。

無事銀海を渡りきる成功率が、最も高いとされている、クインシエラ国ウエトフの船であっても、二十隻の船団が一度に会して出航し、銀海を無事に渡りきることができるのは、三回に一度といわれている。

ウエトフが、銀大陸に向けて船を出すのは、二年に一度。つまり、六年の間に、一度の割合でしか、銀海を渡りきることができていない。

しかも、この三回にたった一度の成功とて、二十隻全てが、無事というわけではないのだ。

銀海を渡り、銀大陸の地を踏むということが、いかに困難なことであるのかが、それだけで知れよう。

しかも、銀大陸に渡ったところで、広大な銀大陸の中、人が足を踏み入れられる場所は、ほんの僅か、例えるなら、人の足のつま先程度に過ぎない。

銀大陸最北端にあるのは、銀大陸唯一の町ドーリア。

そのドーリアから、およそ五十ガズール（1ガズール＝1km）ほど南下した区域までが、一般的に『狩場』と呼ばれ、竜を狩り、

尚且つドーリアまで生還できるぎりぎりの境界とされている。

竜師たちは、その狩場において竜を狩る。

竜は、最小のものであっても三ガズド（1ガズド＝1m）はくだらない。大型のものは、最大で五十ガズドあるものが、確認されている。

銀海を渡りきることも、さることながら、人間が、竜を狩るということは、それこそが命がけの仕事となるのだ。

だが、この博打とも呼べる竜師という仕事に、夢を託す無謀な若者は、後を絶たない。

青大陸では、二極化が進んでおり、巨万の富を持つ一握りの成功者と、そうでない大多数の低所得者とは、はっきりと分かれているのだ。

私たちが住むスルフエのルソン地区の住人は、その低所得者の中でも、さらに最底辺に位置している。

明日の生活どころか、今日の生活すらも危うい、そんな環境に身を置いていた。

今は、リライ師せんせいのおかげで、孤児院の経営は、綱渡りながらもなんとか成り立っている。しかし、いつ破綻してもおかしくないような状況だった。

ラルフは、この現状を打破するためには、自分が竜師になるしかないと思いきんでいる節があった。

実は半年ほど前、ラルフは一度、その夢を皆に語ったことがあるのだ。

しかし、無論、師に大反対されていた。私だって反対だ。

竜師の大多数は、銀大陸にたどり着く前の銀海で、命を落としている。成功をおさめ、無事青大陸に戻ってくるのは、竜師の中でもほんのわずか、ごく一握りでしかない。

そんな無謀な博打ともよべる所業に、大事な家族に等しい存在の命を、賭けさせることなど、許せようはずもなかった。

だが、若さとは、時に途方もない無謀さを生みだしてしまうこと

がある。

それは、若さゆえの勇敢さであり、あるいは浅慮であり、だからこそ己の信念に、純粹に対峙することができた。

ラルフは、表面的には師の言葉に従っていたが、内側では、静かに、そして密やかに、時が来るのを待っていた。

私も師も、ラルフのそんな考えを、薄々感じ取ってはいたが、止める術を持っていなかった。

ルソン地区の子供たちは、己の命を賭けた、零か百かの賭けにか、夢や希望を抱くことを許されない。

そんな過酷な環境から抜け出す術を、私自身も見つけることができずにいたのだ。

### 3 便り

「可愛い子、おいで」

師が、両腕を広げながら、微笑みを浮かべて私を呼んだ。  
曇天の、昼下がりのことである。

師の片手には、届いたばかりの手紙が握られていた。

私は、腰かけていた塀から、勢いよく飛び降りる。小走りに駆けより、私自身も両手を広げて師の腕に飛び込んだ。

師は、目を細めながら、細い体で私を抱き留め、優しく抱え上げてくれる。私はこの瞬間が大好きだった。

私みたいな、お荷物でしかない存在を、師が、心から慈しんでくれていることが、一目見ただけでわかる。

師は、孤児院の、みんなのお母さんだが、この瞬間だけは、私が独占できた。私は、先生の肩に頬ずりして、顔をうずめる。

子供っぽい行為かもしれない。でも、今の私は、人肌に、そして愛情に飢えていた。

私は一人じゃない。

誰かが迎えにきてくれるこの瞬間だけは、その事実を噛みしめることができていたのだった。

「あらあら、甘えん坊さんね。可愛い子」

師が、目じりに細かい皺を刻みながら、片腕で私を抱えなおし、空いたもう一方の手で、私の頭を撫でる。

師は栄養不足のせいか、いつも顔色が悪い。けれども、絶対に笑顔を絶やすことはなかった。

私は、師が好きだ。この細い体で、こんな過酷な環境を力強く生き抜き、血の繋がらぬ子供たちに、惜しみない愛情を注いでくれる。

その優しさと強さとに、私は尊敬の念すら抱いていた。

だが、無防備に全てを委ねることを、私は躊躇っていた。

この優しく温かい腕も、いつかは手放さなければならぬのだ。  
その事実がただ悲しい。

寂しさが、湧き上がってくる。

私はギョツと目を閉じた。

師が、そんな私の頭を、安心させるように、もう一度撫でる。私を抱き上げたまま、孤児院に向かって、ゆっくりと歩きはじめた。

「可愛い子は、あの場所が好きね」

師が、私の背中を優しく撫でながら、口を開く。

別に、好きというわけではないのだが、ついあの場所に足が向いてしまうのだ。

私は、いつも塀の上から、ぼんやりと景色を眺めている。

私が座っていた塀は、緩やかな坂を上りきった丘の頂上にある。

塀の上からだと、背の低い私にもルソン地区が見渡せるのだ。

ルソン地区の、はるか先に見える小高い丘の頂上には、総大理石の、煌びやかな王城が見える。

この現実とは、あまりにもかけ離れたその佇まいに、私は、怒りさえも覚えていた。

あんなものにお金をかけるゆとりがあるのなら、何故もつと社会保障に力を入れないのだろう。この国はどうかしている。国の援助を待つ者は、こんなにもあふれかえっているというのに。

「でもね、何度も言うけど、あんな高い場所に、一人で登ったりしたらだめよ。危ないでしょう」

その言葉は、耳に痛かった。

師に、心配をかけたくはないのだが、幼児であるゆえ、やることもないし、ついあそこに行ってしまう。

「反省しているのなら、これからは、気を付けて？」

師が、私の表情から、気持ちを読み取り、念を押してきた。

しかたがない。しばらく、あそこに登るのは、やめるとしよう。

私は、師に向けて、頷いて見せる。

師は、目を細め、再び私の頭を撫でた。

孤児院につくと、師は椅子に腰かけ、私を膝の上に乗せた。持っていた手紙を、私に見せるように開きながら、口を開く。

「可愛い子、この手紙は、あなた宛てに届いたのよ？」  
師が、私を上から覗き込む。

私は、文面に目を落とす。ウアルスからの手紙であった。

内容は、私が元気に育っているかという心配からはじまり、当たり障りのない彼の現状報告と、師を気づかうような内容の手紙だった。

どうやら、師とウアルスは、知り合いのようだ。

ウアルスは、二年半前、私を師に託してから、一度もここに顔を出したことがない。だが、時折こうして手紙だけは届いていた。

命の恩人が、無事であることに、私は胸を撫で下ろす。

彼自身も、タイミールの残党として追われる立場であり、手紙の内容から、苦勞がしのばれた。

タイミールとは、ここクインシエラ国の隣にあった、小さな国である。

だが、二年半前の、あの日に滅び去り、国はすでにない。旧タイミールの領土は、今、カルグーツ国の管理下に置かれている。

手紙の最後には、近いうちに孤児院に立ち寄ることができそうだという旨と、多少ではあるが、工面できたお金を孤児院に寄付するので、用立ててほしいと結ばれていた。

「ウアルス様が、近いうちに、あなたに会いに来てくれるそうよ。ウアルス様は、あなたにとって、お父様のような存在なのよ？ お会いできたら、あなたのお名前を頂きましょうね」

師は、笑顔で私を覗き込む。

戦場で、成り行きで助けただけの、赤の他人である私の、行く末を気にかけてくれるとは、律儀な男だ。

私は、あの時、ほとんど布に包まれたままだったので、ウアルス

の顔かたちなど、まったく覚えていない。

ただ、戦士独特の、立派な体格をしていたことだけは、記憶に残っている。

太い腕に抱えられ、安心できたことも覚えていた。

誰かが、私を訪ねてきてくれる。そんなたわいもないことが、こんなにも嬉しいことだとは、思いもよらなかった。

天涯孤独の身の上となった今の私にとっては、この二年半の間、いちども味わったことのない経験だ。

ウァルスに会いたいという思いが、強くなった。

無為に生きていくだけの、今のこの私を、誰かが気にかけてくれるのだというその事実。

じわりと湧き上がってくる喜びとともに、ただ噛みしめていた。

#### 4 果たされぬ約束

ウアルスからの手紙の届いた、数日後のことだ。

最近の私の日課は、塀の上で、ぼんやりと景色を眺めることから、孤児院の入り口で、ウアルスを待つことに変わっていた。

私は、入り口に蹲り、路肩の小石をいじる。

男性の人影が見えると、近づくのを感じと待ち、孤児院に立ち寄ることなく通り過ぎると落胆するという行為を繰り返していた。

まったく、いつ来るのか、はつきりと日時を手紙に書いてほしいものだ。どのくらい待てばいいのか、やきもきするではないか。

だんだんと私は不機嫌になる。

いじっていた小石を、投げ捨てる。

今度は棒きれを拾い上げ、ぐりぐりと地面に丸を描いた。

私が勝手に期待して、勝手に落胆していることは百も承知だ。けれども、何もすることがない身の上としては、こうやって待つことくらいしか、できないのだ。

二歳児が、率先して孤児院の手伝いをしたら、気味悪がられるだろう。ここを追い出されたら、今の私には行き場所がない。

師せんせいが、そんな薄情なまねをするはずがないと、頭では分かっているのだが、今の私は、ただ臆病になっていた。

誰かと、本音でぶつかることも、他人から、異分子とみなされることも怖かった。

普通の二歳児を演じている身としては、ここでウアルスの訪れを、じっと待つほかはない。

私は、無言のまま、意味のない模様を、地面に書き散らしていた。不意に、背後から大仰なため息がきこえてきた。

「おい、チビ」

ラルフである。

「そんなところに座ってたら、邪魔だろうが」

ふん、何とでも言え。

私は、ラルフを無視して、地面に木の棒を突き立てはじめる。邪魔だったら、よけて通ってよね。私なら、ちゃんとはじっこに  
いるじゃない。

「チビ」

再びラルフが呼ぶが、私は無視を決め込む。

するとラルフは、舌打ちをしながら、私を抱き上げた。

何すんのよ、離してよ。

私は、無言のまま体をよじって、降ろせと意思表示をする。

ラルフの腕から逃れようと、じたばたもがいたが、ギュツと抱き  
しめられた。

「チビ、あっちで遊んでやる。じっとしてろ」  
は？

何なのよ、今日に限って。

私は、もがくのをやめて、怪訝な表情でラルフを見る。  
ラルフの表情は、明らかに苛立っていた。

「こんなところで、お前を捨てた奴なんか、待つ必要はない」  
ああ、そういうことか。

ラルフは捨て子だ。

ラルフは、私もウアルスに捨てられたから、ここにいると思っ  
てるのだろう。

そうじゃないんだけど。むしろ、ウアルスには、焼け死ぬはずだ  
った運命を、助けてもらっているんだけどな。

「師だって、配慮が足りなかったって、悔やんでるんだぞ。お前が  
毎日、ここでそうやって、いつ来るのかもわからない相手をずっと  
待ってるのを見て、胸を痛めてるんだ」

ラルフが、ギュツと唇を噛む。

「お前を捨てた奴なんて、待ってやる必要はない。父親が欲しいな  
ら、俺がなってやる」

ラルフが、じっと私を見てくる。

「俺は、お前達のことを、絶対に捨てたりしない。俺が、みんなの父親になる。だから、来るのか、来ないのかもわからないような相手、こんなところで待ったりするな」

父親つて…。

まだ十二歳のくせに、何言ってるのよ。

自分こそ、まだ父親が必要な年齢のくせに。

私は、切なくなる。

「待つな」というその言葉が、彼自身に言い聞かせているようにすら聞こえたのだ。

こんな年端もいかぬ子供に、そんな言葉を言わせてしまうこの環境が、酷く悲しかった。

ラルフもまた、親に捨てられたという、癒えることのない傷を抱いているのだと、この時私は、はっきりと理解したのだった。

この日から、私は、あからさまに入り口でウアルスを待つことを止めた。

待つという私の行為が、師の胸を痛めさせ、なおかつラルフの癒えない傷をも刺激してしまうことがわかったからだ。

私は、孤児院の人の出入りがわかるような場所で、ウアルスを忘れたふりをしながら、遊んでいるように見せかけていた。

さらに数日経ち、私の元には、一通の手紙と、ウサギに似た動物の人形が届くことになる。

ウアルスからの手紙には、予定がくるい、孤児院には立ち寄りそうもない旨と、謝罪の文面が、乱雑に書き散らされていた。

そして、私宛の人形と一緒に、数年くらい孤児院が安泰に過ごせそうな大金とが送られてきた。

同じ頃、カルグーツ主導の元、近隣諸国で、大規模なタイミールの残党狩りが行われ、多くの捕縛者と、死傷者がでたらしいとの噂が耳に届くことになる。

師が、いつも以上に青白い顔で、その噂に耳を傾けていたことが、とても印象的だった。

ギョツと握りしめられた師の拳に、私はそっと手を伸ばす。

「せんせい」

師が、強張った表情のまま私を見下ろしてきた。

「わたしのなまえ、ヒトってうちの」

師は、私の言葉を理解するために、瞬きを数回繰り返した。やがてしゃがみ込み、視線の高さを私に合わせる。

いつ貰えるのかわからない名前を、期待を込めて待つことも、辛くなりはじめていた。

私は、最初の人生も、二回目の人生も名乗っていた自分の名前を、師に告げる。

「そう、あなたのお名前は、ヒトと言うのね」

師は、かすかに震える声でそう告げると、私を抱き寄せた。

「とてもよい名前ね。あなたの未来に、幸多からんことを…」

最後は、嗚咽交じりの声に変わっていた。

私は、いつも笑顔を絶やさない師が泣くところを、その日、はじめて見たのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5422y/>

---

竜の盟約

2011年11月22日03時14分発行